

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	稲井 啓之
論文題目	中部アフリカ・カメルーン半乾燥地における内水面漁民の移動性に関する人類学的研究		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、アフリカ・カメルーン北部の半乾燥地を故地とし、遠方への出稼ぎ漁をおこなうムズグンの人々の調査から、漁民の移動性と漁業という生業のもつ特性について考察したものである。</p> <p>第1章では、本研究を始めるきっかけとなったムズグン漁師との出会いのエピソードを紹介した後、そこから漁業という生業形態の特性に関心を持つに至った経緯を述べた。次いでこれまでの人類学におけるアフリカ漁業研究および出稼ぎ漁師についての研究を概観し、さらに調査地域の気候レジーム変遷と、現在の降雨量の不安定性に対する人々の対処行動について整理を行っている。</p> <p>第2章では、申請者がムズグン漁師に関して行ってきたこれまでの調査概要を、時系列に沿って、東部州ンゴコ川、極北州ロゴヌ川氾濫原 (ムズグンの故地)、極北州チャド湖ダラック島の3地域の順に述べ、次いで、ムズグン民族についての概要を記述している。</p> <p>第3章では、ロゴヌ川氾濫原におけるムズグンの漁撈活動の特徴と、出稼ぎ漁開始の要因について述べている。氾濫原では、川の氾濫サイクルに合わせて、漁撈をはじめ農耕、牧畜などの多様な生業が営まれている。河川水位が大きく変動する増水期と減水期に漁は活発化し、とくに氾濫期に下流域より遡上する魚種を対象とした漁は、1年間の生活費をまかない得るものである。出稼ぎ漁の本格的な始まりは干ばつが頻発した1980年代半ばであったが、まず母村から300km離れたチャド湖への出稼ぎ漁が開始され、その後、1,000km以上離れたカメルーン東南部の漁場などへも出漁がおこなわれるようになった。出稼ぎ漁従事者の大半は未婚男性であり、自らの結婚資金を得るために出漁していた。出稼ぎ先は、すでに移住している同郷者との社会ネットワークに考慮しておこなわれていた。</p> <p>第4章では、チャド湖ダラック島における出稼ぎ漁の実態と、そこで行われている鮮魚取引について記述している。チャド湖は古くより燻製魚、日干し魚の供給地として知られていたが、近年、保存・運搬技術や流通路の発達により鮮魚の売買も可能となってきた。従来の加工魚取引においては、漁師たちは取引商人から漁具や現金の貸与を受け、漁獲物を返済に充てる慣習があった。しかし鮮魚取引においては、漁獲に用いられる漁具は安価なものであり、また取引相場が安定しているため、商人との固</p>			

定的な関係は見られなかった。調査村の未婚のムズグンたちは、鮮魚取引に携わることにより、比較的自由に漁撈に携わり、現金稼得の手段を得ることができていた。

第5章では、カメルーン南東部を流れるンゴコ川に赴いたムズグン漁師の漁業戦略と、地域住民との共生の状況を記載している。この地域では近年、商業伐採活動によって労働者の食料需要が増加し、「よそ者」であるムズグン漁師が入り込む余地が生まれてきた。地元の漁師は狩猟、農耕をも含めた多角的な生計を営んでいたが、ムズグンたちは対照的に、短期的な漁獲量の最大化を図る形での漁を行っていた。両者の関係が顕在的な対立に至らない背景には、地元漁師の掛け売りや借金の踏み倒しを容認するといったムズグンの社会的な配慮が存在した。次いで、この地へ赴いたムズグン漁師のライフヒストリーの分析から、異なる環境において、体力・知力を注いで漁撈活動に従事する「インテンシティ」と、チャンスがあるとすぐに行動に移すことのできる「即興性」という、「漁師の気性」の特性を明らかにした。

第6章においては、ここまでの記述分析を踏まえて、アフリカ内水面における漁撈活動について考察している。漁師たちもつ「漁民性」とでも呼べる特性は、水産資源へのアクセシビリティに起因すると考えられる。漁業は資源を育てる農耕や牧畜と違って、魚という資源を採捕することによって成立する生業活動である。漁師たちは常に、不安定な資源の状態を即座に判断し、次の手を考えて行動しなければならない。漁師たちは、活動へのインテンシティと状況への即興性をもって対応することで、このような不安定な状況を乗り越えていた。最後に、このような漁師のもつ性質を踏まえて、「よそ者」の参入が大半を占めるアフリカの漁撈活動においては、従来のように固定的で閉じたコミュニティを前提とした資源管理にかわって、移動民をも含む多彩なステイクホルダーがかかわる状況の丹念な把握のもとに漁業資源管理が計画されるべきであることを論じた。

(論文審査の結果の要旨)

本研究は、アフリカ・カメルーン極北州の半乾燥地域を故地とするムズグン漁民の調査をもとに、漁業という生業活動の性質に根ざす、漁民の特性について考察したものである。

申請者の稲井氏は、調査の初期にはカメルーン東南部の熱帯雨林において、現地の農耕民のおこなう漁撈活動の生態人類学的な研究をおこなっていた。そこで稲井氏は、HA氏というムズグンの青年に出会うが、彼は故地である極北州から、1000km以上も離れた東南部に移動して漁撈をおこなっていた。このことをきっかけに、稲井氏の関心は、HA氏らがなぜそのような長距離移動を伴う漁撈をおこなっているのか、という点に移行してきた。

アフリカに留まらず世界各地に、このような長距離の移動を伴う漁撈活動を展開する漁民たちの例は見られる（たとえば、沖縄の糸満系漁民たちもそうである）。そして彼らは、独特の「進取の気性」とでも言うべきものを備えていることでも知られている。稲井氏は、カメルーン東南部ンゴコ川、極北州ロゴヌ川氾濫原、極北州チャド湖ダラック島という3つの地域におけるムズグン漁師の調査から、このような漁民に特有の気性がなぜ生まれ、それが漁業という生業のどういった特徴に根ざしているのかを明らかにしようと試みたのである。

このような背景を持って書かれてきた本論文は、以下の3点において、生態人類学、地域研究に対する大きな貢献をなしている。

まず第1に、本研究は、日本においては数少ないアフリカの漁民の生態人類学研究だという点である。そしてその調査は、一つのフィールドに留まらず、熱帯雨林から半乾燥地、そして内陸湖沼に至る、さまざまな生態学的環境を横断したスケールの大きな地域研究となっている。その意味で、従来の一点集中的な生態人類学の枠を越えた研究だと言ってよいだろう。

第2に、環境要因と社会的要因を有機的にリンクさせてムズグンの人々の生きる姿を描き出し、そこから漁業を生業とする人々の「漁民性」とでも呼ぶべき性質を記述することに成功している点である。そもそも天然の水産資源は、自らの再生産によって更新可能であり、元来誰も所有権を持たない「無主物」であり、さらに先に取った方が漁獲量が多い、といった特性を持っている。このため、土地に縛られず機敏に資源にアクセスできる「遊動性」が、漁民にとって重要な身構えとなってくるのである。こういった漁民の姿が、数量的データの分析とライフヒストリーの記述によって生き生きと描き出されている。

第3に、魚類資源の管理に関して、地域研究の視点からの重要な提言がおこなわれている点である。ムズグンをはじめとするアフリカの漁師は、当該の地域にとって、他地

域からやってきた「よそ者」であることが多い。実際、カメルーンにおける漁業従事者の84%が他国あるいは他地域出身者であるという調査結果もある。近年、「コミュニティに根ざした資源管理」の重要性が叫ばれているが、漁業においてはそもそも、当の「コミュニティ」とは何なのかということから考えないと、議論は砂上の楼閣となってしまう恐れがある。稲井氏は、出稼ぎ漁をおこなうムズグンと、出先地の人々とのさまざまな形の関係を記述することによって上記の問題を提起し、今後の魚類資源管理には、「よそ者」をも含め、現地の実情をしっかりと見据えた上での資源管理計画が望まれると結論している。

以上のように本論文は、独創的で質の高いアフリカ漁民研究として、生態人類学、地域研究の視点から高く評価できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成31年1月25日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。